

若い友人への手紙

飛浩隆

tobi hirotaka

「島根ってこんなに光が鮮やかなんだ！」

十一月の早朝、出雲空港に降りたあなたは、駐車場で私の車に乗り込みながら言いました。たしかにその日は「山陰」の名を返上できそうなほど素晴らしい天気でした。稲刈りの終わった田園風景の中を走りながら、私はあなたにクイズを出したのでしたよね。

「あれが何かわかりますか？」

「ただっ広い平野に点在する、お屋敷然とした農家を指差して私は問いました。」

「あれ？」

はじめあなたは私がなにを指差したのかわからなかった。しかし車が近づくと、家屋を取り巻く木々に気がつきましたね。

「おもしろい！ 松の木が敷地の縁をぐるぐると取り巻いている。衝立てみたいですよ」

「あれはね、築地松っていうんです」

宍道湖の西に広がる簸川平野は、風をささげる山や丘が少ない。季節風や台風は容赦なく人家を攻め立てます。これをふせぐため黒



松を張り巡らしたのが築地松です。

「役割は防風林と同じだけど、でも、海岸の松林とは大いに違うでしょう？」

「ええ、ぜんぜん。すごく——きれい」

遠目には、築地松は屋敷をすっぽりと覆う直方体の編み籠のようです。頂辺はほぼ水平で、側面も真っ直ぐ立ち上がっている。近くに寄れば、そそり立つ緑の壁に圧倒されますし、内側に立つと、家屋側の枝が伐り落とされてきているため、幹と枝がえがく巨大な葉脈にも似た模様をつぶさに観察できます。二階建てのお屋敷をそっくり覆い隠せる、高さ十メートルにもなる高垣。しかしなにより素晴らしいのは熟達の職人による剪定のわざです。

「レースのカーテンみたい」

枝と枝、葉と葉のあいだには、ほどよい空隙が繊細に配され、光や空気が行き来します。鬱蒼とした森ではなく、工芸和紙の繊細さ、日本家屋の建具の清潔な美しさや静けさ、そんな美意識さえ感じさせるのです。

「田植えの頃に来てご覧なさい。水田に映る築地松は、ほんとうにきれいだから」

「ですね！」

遠ざかる築地松を目で追うあなたの声に、しかし私はずいぶん、胸が塞がるような思いに襲われたのです。

私たちの世代は、公正で賢明な社会をあなた

たちに受け渡すことに失敗した。この十年というものの公共の言説はけがされ、高官の嘘は糊塗さえされなのまま、いまこのときも大手を振って罷り通っています。

築地松の剪定作業を、土地のことばで陰手刈りと呼びます。職人は、高い高い梯子に乗り、長い柄のついた鎌のような鉋を薙刀のように揮って枝を切り落とす。危険で忍耐のいる重労働です。しかしこれを怠れば枝葉は際限なく繁り、風も光も通さぬ牢獄になるでしょう。嘆くだけでは十分でなかった。私たちは忍耐よく剪定を続けなければならなかった。だがもうすべては遅い。そんな無力感に覆われていました。この日の夕方までは。

そう、その夕方、私たちは松江市の宍道湖畔で日没を待っていたのでしたね。宍道湖の夕景は言語に絶する美しさです。適度に雲があるとき空はいちめんの錦繡となって燃え上がりますが、真にすばらしいのは完全な晴天かつ無風の日です。湖面も空もたそがれの中に一様に溶け、鉦の音の靈妙な余韻のようにすべてがゆっくりと夜にうつろっていく。

覚えていますか。あの日雲は一片もなかったけれど、風が湖面を荒らしていましたね。淡青と朱をたたえて発光する空とは対照的に、波は夕闇をはらんで暗く不穏でした。

考えてみれば当然です。波は逆立った鱗の

ように西からの光を遮るから、私たちはいわばその鱗の裏側を見ていたわけです。またしても憂鬱にとらわれかけたそのとき、あなたは空を指差してむじやきに飛び上がった。

「あ、ひこうき雲！」

高い所にひとすじ、金の糸をぴんと張ったように飛行機の航跡が光っていました。そうして、とつぜん私は思った。この湖面を夕陽の側からみたらどうだろう、と。

こちらが鱗の陰ならば、向こう側からは「表」が見えるのでは？ 夕陽を背にすれば、みずうみ全体がまばゆく輝いているのでは？ そう思ったとき、ようやく私は思考の縛めから解放された思いがしたのでした。

若い友人よ、あなたが朝、島根の光があざやかだといったとき、私は実は意表を突かれていたのでした。山陰は雲が垂れこめた暗い土地だ——そんな先入観を一笑に付す力があるあなたの声にはあり、事実、紅葉の兆した山も民家の庭先の小菊もなにかもが美しい一日でした。怠惰な私の目に見えないものも、あなたには自明のこととして映る。

あなたたちの未来はまばゆく輝くのかも知れない。ならば私たちも、いまひとたび剪定の道具を執らねばならないでしょう。光と風の通う空隙をとりもどすために。

(とび ひろたか・SF作家)
著書に『零號琴』(早川書房) など